

「……ええと、良くわからないんですが家政婦もどきになれってことですか？」

同棲、というのとは一緒に住むことで、つまり誰とも会わずにひたすら家事をやれ、という意味だろうか。良くわからない要求だ。

「違うだろ。帝人君って、頭悪くないけど馬鹿だよ。家政婦なんて求めてないよ。必要なら普通に雇うし」

確かに臨也の経済力なら家政婦も雇えるのだろう。けれどそれなら、臨也は何が言いたいのか。

「本気でわかんないんだ？」

呆れ果てた、と言わんばかりの口調で臨也は言い、ずい、と顔を寄せてくる。いきなりの超アップにぎよつとした。

「ちょ、近……つ」

近いです、臨也さん。そう言いたかったのに、最後まで告げる前に唇が強引に重ねられた。そのまま、舌を絡め取られる。

「ん、う……つ」

強引なのに、どこか優しい。ひどくちぐはぐで濃厚なそれ。やがて唇が離れる。

「……わかるだろ。わかってるんだろ、もう」

「今、ちよつと、もしかして、とは思ったんですけど。あの、臨也さん」

「何？」

躊躇いつつ、それでもどうにか口を動かす。

「もしかして、僕のこと、好き、なんですか？」

「そりや好きだよ。だって君は俺が愛する人間なんだから当然だろ」

その言葉に身体力が抜けた。がくりと項垂れる。

「それだけじゃないみたいだね。我ながら良くわからないんだ。だからさ、もっと君を近くで観察したいんだ」
まるで口説かれていたみたいだな、と思う。というか、たぶん、間違いなく、これは口説かれている。ただし臨也はその自覚がないらしい。

はあ、と深くため息をついた。

「とりあえず、この体勢、やめてください。少し、話し合いましょう」

「何、縋る気になった？」

押さえつけていた腕の力が弱まり、ほつとする。彼が自分から退き、身を起こすことに成功した。

「浮気しないって約束してくれるなら、縋りませんけどいろいろ考え直します」

「何それ。何で俺が折れること前提なのかな」

不満そうに告げる男は、本当に最低だ。最悪だ。傲慢すぎる。

「じゃあ僕たちはやつぱりもう終わったってことで、お帰りください」

「それはナシ。却下。認めない」

真顔で告げられ、呆れるしかない。

「わかった。譲歩しても良いよ。けど、俺と同棲してシズちゃんとは絶縁」